

インド・ムスリムとヒンドゥーの言語交流  
—ペルシャ・アラビア文字による音写と発音表記をめぐって—

榊 和 良  
(北海道大学大学院)

The Hindu-Muslim Linguistic Communications in India  
—vernaculars transliterated in Perso-Arabic script—

SAKAKI, Kazuyo

Graduate School, Hokkaido University

In the early period of Hindu-Muslim contact, there were close linguistic communications. The interactions between them deepened after the 12th century. In the 16th century, extensive Persian translations of the Sanskrit classics were done. Indo-Muslim writers left many works about Indian religious cults, custom and scientific thoughts. Among these works, we can find many technical terms and proper names of Indic origin transliterated in Perso-Arabic script. These are not only from Sanskrit but from other vernaculars as well. These vernaculars were not only introduced as foreign words but used as a means of communications. Perso-Arabic script was employed for poetry, prose and official orders in various regional languages. Besides Persian, the official language, Indic vernaculars played an important role in Hindu-Muslim communications.

Al-Bīrūnī pointed out the difficulties in pronunciation and transliteration of Indic words in the Perso-Arabic writing system. Indo-Muslim writers tried to overcome the inadequacy of their script for Indic languages. In the history of Arabic grammar, they established their own method to show the pronunciation of foreign words. This system called *i'rāb* has been inherited by many Islamic scholars and lexicographers. Abū'l Fazl adopted the orthodox style, but Mīrzā Khān invented an original style of description. These transliterations and *i'rāb* give us much linguistic information about the languages of the day.

For example, Abū'l Fazl's transliteration and *i'rāb* in the *Ā'in-i-Akbarī* give us some materials for the linguistic study of the vernaculars used in the Mughal court. It sometimes shows the phonetic characters such as double consonants preceding the semivowels and in certain cases, it retains a final vowel from Sanskrit. In this way, the study of the transliteration and *i'rāb* by Indo-Muslim writers reveals the phonetic features of and gives evidences on the growth of vernaculars of the day.

## はじめに

インドにおけるムスリムとヒンドゥーの宗教・思想交流は12世紀以降さかんになり、16世紀から17世紀にかけてのムガル朝全盛期に黄金時代を迎えた。人的交流に加えて、多くのサンスクリット語文献が主としてペルシャ語に訳され、他方、ペルシャ・アラビア文字は日常用いられている各地の土着語を書き表す手段ともなった。そこには、文字組織も音韻構造も異なる言語の間の交流が見られる。

この時代のインド・ムスリムによるペルシャ語文献に音写の形で紹介されるサンスクリット語彙の中には、単純にサンスクリット語を写したものではないと考えられるものが多く含まれていることがわかる。すなわちサンスクリット語の崩れた形、サンスクリット語以外の言語の存在が認められるのである。このことは、翻訳のための原典を始めとするサンスクリット語によるインドの学問を伝える媒介となる言語の存在を想定させる。

この研究ノートでは、インド・ムスリムによる言語に関するペルシャ語資料を中心として、ヒンドゥーとムスリムの言語交流の姿を、音写の形で紹介されたインド語起源の語彙の上から探っていく。どのような土着語が、どのような形でインド・ムスリム社会に吸収され浸透していったのか、その過程の中で音写と発音表記の果たした役割に注目して、当時の言語環境の姿を明らかにしてみたい。

なお、この研究は「異文化相互理解における言語の研究 — ムガル朝後期インド・ムスリムの言語理解」と題して「平成2年度 アジア・アフリカ言語文化研究所 公募共同研究」(担当教官：奈良毅教授)として行ったものである。

## I 土着語〔近代諸語〕の紹介

インドにおける共通日常語ヒンドゥスターニー語<sup>1)</sup>の存在が西欧世界に知られたのは、1616年の Terry による Indostan という言語に通じた Tom Coryate の紹介が最初であったといわれる<sup>2)</sup>。このように17世紀初頭になって知られるようになったインドの *lingua franca* としての言語の存在は、現地に暮らしたインド・ムスリムの目にはどのように映っていたのか。その記録をたどると西欧の旅行家らの記録よりも数世紀時代を遡ることになる。

既に、10世紀のアル・マスウデーの時代から、インドの土着語の存在はイスラーム世界に伝えられていたが、インド・ムスリムの記録は12世紀のアル・ビールニーにたどることができる。彼は『インド誌 (*Kitāb fi Tahqīqi Mā li'l-Hind*)』の前書きにおいて、ヒンドゥーとムスリムを隔てる五つの障壁の筆頭に言語をとりあげている<sup>3)</sup>。まず、インドの言語 (*lughat*) は、俗語 (*mubtazal*) と洗練された文語 (*faṣīḥ*) の二つに分けられる。俗語について、その名称を示してはいないが、第16章で、シッダマートリカー〔悉曇文字〕、デーヴァナーガリーを始めとする11種の文字をインド人の用いる文字として紹介している。それらの中には、グジャラーティー語、パンジャービー語、カンナダ語、スィンディー語などの文字が含まれている<sup>4)</sup>。

14世紀に活躍した宮廷詩人アミール・ホスロー (Amir *Khusraw*) も、『九つの天 (*Nuh Sipīhr*)』の「第三天」において13種類の土着語をそれらが用いられる地域名で紹介している<sup>5)</sup>。それらは、スィンディー語、

1) 本稿では、Grierson. 1968. p. 47 の定義に従って、デーヴァナーガリー文字でもペルシャ・アラビア文字でも書き表される共通言語としてヒンドゥスターニー語という名称を用いる。特に必要のある場合、ヒンディー、ウルドゥーの表記をする。語彙については、Platts. 1884. を参照する。

2) Grierson 1968. p. 3.

3) Al-Birūnī 1958. p. 13

4) *ibid.*, p. 135.

5) Elliot and Dowson 1964. p. 563.

パンジャービー語、カシュミリー語、ドゥーグリー語、タミル語、テルグ語、グジャラーティー語、マラーヤラム語、古マイティリー語、ベンガリー語、アワディー語、ヒンドゥスターニー語を示すものと考えられる。

17世紀半ば、アワド地方出身のムスリム、マリク・ムハンマド・ジャーエスイー (Malik Muḥammad Jāysi) は、ラージプートの王女を主人公にした701頃からなる叙事詩『パドマーワティー (Padmāvati)』を著し、最初のアワディー語詩人と称された。ペルシャ・アラビア文字を用いた音写の形をとる写本も残っているこの作品では、当時この地域で用いられていた言語として、トルコ語、アラビア語、ヒンダウィー語の三種類が挙げられている<sup>6)</sup>。

第三代ムガル皇帝アクバルのもとで、『アクバル会典 (Ā'in-i-Akbar)』を著したアブール・ファズル (Abū'l-Faḍl) も、各地にそれぞれの土着語が存在していることを示している<sup>7)</sup>。それらは、ヒンドゥスターニー語、ベンガリー語、シンディー語ムルターン方言、グジャラーティー語、テルグ語、マラーティー語、カンナダ語、シンディー語、パシュトー語、バローチー語、カシュミリー語を示すものと考えられる。アブール・ファズルはこの作品の中で、ヒンドゥーの18種の学問 (vidya) を紹介しているが、その第9番目として文法学を取り上げ、サンスクリット語 [デーヴァナーガリー文字] について解説している<sup>8)</sup>。これらの詳細についてはⅢ、Ⅳにおいて扱うことにする。この作品全体、とりわけ第三部「インドに関する記述 (Aḥwal-i-Hindūstan)」においては、数多くのサンスクリット語などの術語が音写の形で紹介されているがいずれの場合も、「インド

の言語 (zabān-i-hindī)」と示されている。彼は、大叙事詩『マーハーバーラタ』のペルシャ語訳『戦記 (Razm Nāma)』の前書きでも、この作品が「インドの言語」から訳されたものであると表明している<sup>9)</sup>。これらの作品の中で音写の形で紹介される多くの術語などを検討すると、彼のいう「インドの言語」が主としてサンスクリット語であったと理解できる。しかしながら、日常語であったヒンドゥスターニー語も垣間見られることが注目される。

17世紀半ば、第五代ムガル皇帝シャー・ジャハーンの時代、ムバド・シャー (Mubad Shāh) というゾロアスター教からの改宗ムスリムは、『諸宗の教え (Dabistān-i-Mazāhib)』の中で、当時のヒンドゥーの宗教諸派や哲学思想をサンスクリット語の術語を駆使して解説している。そこからは、サンスクリット語、ヒンディー語、ダキニー・ウルドゥー語、テルグ語などの知識をもっていたことや、ネワール語の難解さに苦慮したことなども読み取れる。

続くオーラングゼーブ帝の時代に、ミールザー・ハーン (Mirzā Khān) は、『インドの賜物 (Tuḥfatu l-Hind)』の中で、ヒンドゥーの用いる文字について詳細に伝えている。この作品は、西部ヒンディー語方言群の一つ、ブラジュ・バーカー [バーシャー] の最初の文法書と評価されているが、デーヴァナーガリー文字をペルシャ・アラビア文字を使って表す方法を示し、発音表記を伴っている点で先に紹介したアブール・ファズルの『アクバル会典』と比較できる。さらに、その中に含まれる豊富な術語解説から、『インドの賜物』は『アクバル会典』の写本の書写人らによって行間に引用されたことでも注目される<sup>10)</sup>。

6) Jāysi 1944, p. 371.

7) Abū'l Faḍl 1869, p. 58.

8) *ibid.*, pp. 117–119.

9) *Mahābhārata* 1979, 前書き. p. 21.

10) Abū'l Faḍl 1868, pp. 2–3.

ミールザー・ハーンによると、インド人の言語は、多くの学術書が書かれるサンスクリット語〔彼の発音表記では〈sahanskirt〉〕、王侯・貴族らを讃える詩に用いられるプラークリット〈parakirt〉、一般民衆の言語であり恋の詩を詠むのに用いられるバーカー〔バーシャー〕〈bhakha〉に分けられる<sup>11)</sup>。

一方、西欧世界にサンスクリット語が言語として紹介されたのも、土着語〔近代諸語〕の紹介とほぼ時を同じくしていた。サンスクリット語の文字や文法を伝えたハインリッヒ・ロート (Heinrich Roth)<sup>12)</sup>がイエズス会の宣教師であったように、タミル語やマラーヤラム語といったこの時代のインドの近代語研究の一翼を担ったのは各派の宣教師たちであった。イエズス会士らの書簡からも、彼らが土着語の達人であったことがうかがえる。イタリア人イエズス会士フランシス・モーランド (Francis Morando) は、ダーラー・シュコーに仕えたアルメニア人キリスト教徒ミールザー・ズール・カルナイン (Mirzā Zū'l Qarnain) という人物の子供たちのベルシャ語とヒンドゥスターニー語の家庭教師を16年間務めたという<sup>13)</sup>。このように、ヒンドゥスターニー語は、ベルシャ語と共にこの時代のインド・ムスリムにとっては必要不可欠なコミュニケーション手段としての日常語であった。

## II 土着語の吸収

土着語は、一方では語彙としてインド・ムスリム世界に吸収されていった。アル・ピールニーの『インド誌』の中でも、単位系や

月の名などにヒンディー語名が登場してくる。16世紀、グルバダン・ベーガム (Gulbadan Begam) によって書かれた第二代ムガル皇帝フマーユーンの伝記『フマーユーン・ナーマ (Humāyūn Nāma)』でも、アル・ピールニーが紹介した pahar, gharī といった時間の単位や lakh といった数の単位が用いられている<sup>14)</sup>。

アブール・ファズルも『アクバル会典』の中で、先に述べたように土着語の種類を列挙しているだけでない。単位系や月の名はもちろん、音楽 (saṅgīta) の解説において、各地の土着語も取り入れている。彼は、まず音楽を mārga (mārag) と deśī (disi) に大別してから、deśī の例としてアークラやゲアリオールで盛んな dhruvad (dhruvad) をとりあげている。このドゥルパドが、デカンでは chind (cind), テリンガーナやカルナータカでは dhruva (dhuruw), デリーでは kawwāl や tarānā, マトゥラーでは viṣṇupada (bishnpad), ラーホールとその周辺では chand (chhand) などと呼ばれることを紹介している<sup>15)</sup>。

17世紀、皇帝シャー・ジャハーン時代に、ダーラー・シュコーのもとで訳されたベルシャ語訳ウパニシャッドの中で「インドの言語」として音写の形で示されるものは、サンスクリット語だけではなく。それらの中には、ヒンドゥスターニー語にもとづいたと考えられるものもある。すなわち、サンスクリット原典に同義語が示されている場合は [ ] で示すと、sāwan (ヒンドゥー暦四月) 〈Maitrāyaṇa-upaniṣad 7-3, Praṇava-up. 3,

11) Ziauddin 1935. pp. 53-54. ブラジュ・バーカーの文法を扱った部分だけが、ここに校訂・英訳されている。テヘランからも校訂本が出ているが、デーヴァナーガリー文字との対応から本稿では、Khuda Bakhsh Library MS. No. 4622, Hand List No. 882, 883 を用いる。cf. *Tuhfatu l-Hind* 1975.

12) ロートの紹介したデーヴァナーガリー文字は Kircher 1667. に含まれているが、文法書については写本として残されている。Camps and Muller 1988. 参照。

13) Hosten 1916. p. 147.

14) Siddiqi 1937. pp. 371, 374-375.

15) Abū'l Faḥl 1869. pp. 138-139.

Āruṇika-up. 4), bhādoṅ (ヒンドゥー暦五月) <Maitrāyaṇa-up. 7-3>, barsāt [barṣā] (雨期) <Maitrāyaṇa-up. 6-22, 7-3>, ghariyāl [kānsya] (銅鑼) <Maitrāyaṇa-up. 6-22>, pakhāvaj [mṛdaṅga] (太鼓) <Hamsanāda-up. 2>, ghaṇṭā [kinkīṇī] (鈴) <Maitrāyaṇa-up. 6-22>, pahar (三時間) <Maitrāyaṇa-up. 6-14, Garbha-up. 3, Tadeva-up. 2>, do pahar (昼) <Śaunaka-up., Mṛtyulāṅgala-up. 1>, ghaṇī (二十四分) <Maitrāyaṇa-up. 6-14>, lakh (十万) <Maitrāyaṇa-up. 3-3, Sarva-up. 2, Mahānārāyaṇa-up. 1-8, Ātmaprabodha-up. 1, Garbha-up. 5>, dām (量の単位) <Garbha-up. 5>, bāns [veṇu] (竹) <Hamsanāda-up. 2>, kuhṛā [nīhāra] (霧) <Śvetāśvatara-up. 2-11>, bīrbahūṭī [rakta] (天道虫) <Amṛtanāda-up. 37>, nāgā (中斷) <Amṛtanāda-up. 29>, dāl [bṛgala] (豆) <Bṛhadāranyaka-up. 1-4-3>, cabūtrā (壇) <Bāṣkaramantra-up. 15>などが含まれていることがわかる<sup>16)</sup>。

ペルシャ語詩人たちもマスナウイー (maṣnavī) やクッリヤート (kulliyāt) の中でヒンドゥスターニー語をしばしばペルシャ語詩の中に用いている。シャー・ジャハーンの宮廷詩人アブー・ターリブ・カリーム・カーシャーニー (Abū Ṭalīb Karīm Kāshānī) は、マスナウイーの中で, paisā, rupayā といったお金の単位, dhobi (洗濯屋), rājput (王族), barsāt (雨季) などの語を, カシュミールの領主ザファル・ハーン・イフサーン (Zafar Khān Iḥsān) は, hariyālī (ドゥルヴァ草), ber (棗), kelā (バナナ), pān (キンマ) といった植物名などをペルシャ語詩の中に用いている<sup>17)</sup>。

同じシャー・ジャハーンの時代, 先に紹介

した『諸宗の教え』では, この時代の各地の土着語が垣間見られる。たとえば, ホーマ (homa) の儀式に用いられる植物名が, サンスクリット語, ダキニー・ウルドゥー語, テルグ語, ヒンディー語と区別して示される。ギョウギシバをさすサンスクリット語の Dūrvā は, ダキニー・ウルドゥー語では Haryālī (現代ヒンディー語では Hariyālī), テルグ語では Karki (現代テルグ語では Gericha), ウドゥンバラ (優曇華) はサンスクリット語では Udumbara だが, ダキニー・ウルドゥー語では Gūlar (現代ヒンディー語では Gūlar, Umar), テルグ語では miri (現代テルグ語では Atti, Bodda, Baidi, Udumbaram) と呼ばれるなどと伝えている<sup>18)</sup>。

土着語は, 語彙として取り入れられたばかりではなかった。ペルシャ・アラビア文字は, この時代の記録文字としての役割を担っており, 多くの土着語がこの文字を媒介として書き表されることでインド・ムスリム世界に浸透していった。それらの中には, 先に紹介したアワディー語作品『パドマーワティー』だけでなく, ヒンドゥスターニー語で表された文学, 修辞学, 詩学の書物, また行政文書なども含まれていた。

アクバルの時代のハーン・ハーナーン・アブドゥルラヒーム (Khān-i Khānān Abdur Raḥīm) を始めとするムスリム宮廷詩人たちは, ヒンドゥスターニー語詩を創作して王侯・貴族らの寵愛を受けた。それをペルシャ・アラビア文字で音写した写本も数多く残っている。宮廷人の生活にもヒンドゥスターニー語は普及していた。イエズス会士の書簡の伝える所によれば, ダーラー・シュコーも

16) *Sirr-i-Akbar*, 1957. この作品をラテン語訳した Anquetil Duperron は, ダーラー・シュコーによる前書きへの訳註で, 本文中でイタリック体で示す語句は, samskretica, indoustanica, persica と写本中の朱文字で書かれたものであると記している。Oupnek'hat 1801. p. 421. これらの区別は訳文や脚注には示されていない。

17) Abidi 1975. pp. 50-51.

18) Mūbad Shāh 1943. Vol I, p. 143.

父シャー・ジャハーンのためにドゥルバドを歌ってくれるように臣下に所望する際、「わが兄弟 (mere bhāi)」と呼びかけたという<sup>19)</sup>。さらに、彼自身もヒンドゥスターニー語で作品を残したともされている<sup>20)</sup>。遡って、既に13世紀からスーフィー聖者らは、神秘詩をベルシャ語だけでなく土着語でも作り、宗教集会 (samā') の折にはヒンドゥスターニー語のドーハーが、ベルシャ語のガザルと同様に歌われたという<sup>21)</sup>。このように日常語としてのヒンドゥスターニー語が台頭してくる一方では、ゴールコンダを都としたクトゥブ・シャーヒー朝のスルターン、ムハンマド・クリー・クトゥブ・シャー (Muhammad Quli Qutb Shāh) のように、ダキニー・ウルドゥー語ばかりでなくテルグ語で詩作する者も現れた<sup>22)</sup>。

一方、宮廷語であるベルシャ語を学んで奉職するヒンドゥーの文人たちも、このような土着語の普及の手助けをした。皇帝シャー・ジャハーンに随行して宮廷の行事や日常生活を記録して『四つの果樹園 (Chahār Chaman)』を著したのは、ヒンドゥーのチャンドラ・バーン・ブラフマン (Chandra Bhān Brahman) であった。彼は、後にダーラー・シュコーの書記 (munshī) となって、王子とヴィシュヌ派のヨーギン、バーバー・ラール・ダース (Bābā La'l Dās Bairāgi) と

の間の七回に及ぶ対話を記録し、それをベルシャ語に訳している。この作品の中ではヒンドゥスターニー (ウルドゥー) 語詩が挿入され、原語のまま表されている<sup>23)</sup>。このようにヒンドゥーの側でも、宮廷に関わりをもった文人たちは、サンスクリット語の知識をもつ一方で、それぞれの土着語を詩文など形を通して宮廷に持ち込んだのであった<sup>24)</sup>。

### III 音写法と発音表記法

#### III・1 アル・ビールーニーの指摘する問題

アル・ビールーニーは、先に紹介した『インド誌』の前書きで、インドの言語の発音の難しさを訴えている<sup>25)</sup>。インドの言語の文字はどれもアラビア語やベルシャ語の文字とは似ていない。ベルシャ語やアラビア語を母語とするムスリムにとっては、舌や口蓋を使ってそれらを正しく発音することも、耳で類似の音を聴き分けることもできない。彼らの文字をベルシャ・アラビア文字で書き表すことは困難である。発音を示すためには、アラビア語の母音点 (nuqta) や符号 ('alama) を無理に変えなければならず、発音表記 (i'rab) によって限定するためには、一般に理解されているやり方だけではなく、実用的なやり方をとらなければならない<sup>26)</sup>。さらに、母音をもたない子音が二つか三つ結合さ

19) Hosten 1916. p. 161.

20) *Dohāstavasamgraha* と *Sārasamgraha* という二つの作品が、Dārā Shāh の著作とされている。Mīra Bandhu Vinod 1928. p. 441.

21) Rizvi 1978. pp. 326-328.

22) 彼の詩作に見られるアラビア語系、ベルシャ語系、ヒンディー語系、ダキニー語系語句の混在の例は、鈴木 1975. pp. 69-70 に詳細に分析されている。

23) *Mukālima-i Dārā Shukoh wa Bābā La'l* 1926. pp. 285-234.

24) この時代に、シャー・ジャハーンやダーラー・シュコーの寵愛をうけたカヴィーンドラ・サラスヴァティー (Kavīndra Sarasvatī) は、カルナータカ (カンナダ) 語で詩 (特にドゥルバド) を歌ったが、宮廷の人々は意味を理解できないながらもその美しい旋律に魅了されたということ、アブドゥル・ハミード・ラーホーリーは『パードシャーナーマ (*Pādshāh Nāma*)』に伝えている。

25) Al-Birūnī 1958. pp. 13-14.

26) ここでの i'rab について、この作品の英訳をした Edward C. Sachau は、本文中で「格語尾の変化」と訳して、訳註において「語末の子音の読み方」という解釈と採るべきであるという考えを示している。Sachau 1983. Vol. II, pp. 258-259. cf. *E.I.* 1987. pp. 511-513.

れ、このような子音で始まる語は発音することが困難であると、複合子音の問題を指摘する。

彼は、韻律 (chandas) の解説においても、音節の説明をする際に、複合子音について言及している<sup>27)</sup>。アラビア語では、母音をもたない二つの子音を結合させることはない。ペルシャ語では、そのような子音を「母音の弱い (Khafif) 子音」と名づけているが、三つ以上重なることはない。インドの名詞の多くはこのような子音で始まっていて、母音をもたないと示されていないければ、隠れた母音をもっていると schwa の存在も指摘している。

アル・ピールーニー自身は、多くのサンスクリット語やヒンドゥスターニー語を音写語で紹介しているにもかかわらず、発音表記には手を染めていない。また、ペルシャ語訳ウパニシャッドの中でも、サンスクリット語やヒンドゥスターニー語からの音写語は、900語余りにのぼるが、母音符号 (a = fathā, zabar; i = kasra, zer; u = ḡamma, pesh; そ

れぞれの母音符号をもつものを maftūḥ, maksūr, mazmūm と呼ぶ) や二重子音符号 (shadda) や長音符号 (madda) が完全に記されていないために、ローマ字表記することは困難を極める。この作品をラテン語訳した Anquetil Duperron は、翻訳に際して、ペルシャ・アラビア文字に写されたサンスクリット語などの読みを復元しようと努めている<sup>28)</sup>。時には、訳文中のペルシャ語さえもこの手法によりローマ字表記しており、さらに書写人の誤記をそのまま音写している場合も見られ、「ペルシャ・ラテン語」と呼ばれる特異な文体を生むこととなった。

アル・ピールーニーによって指摘された発音の困難さ、それをペルシャ・アラビア文字を用いて表記することの難しさは、その後のインド・ムスリムによってどのように克服されていったのか、以下にアブール・ファズルとミールザー・ハーンによる試みを検討することによってその方法を探ってみたい。

27) Al-Birūnī 1958. p. 106.

28) たとえばⅡで紹介したヒンドゥスターニー語語彙と考えられる語のいくつかを、サンスクリット語原典の語、ペルシャ語音写、デュペロンのローマ字表記、推定されるヒンドゥスターニー語のローマ字表記の順で比較対照してみると次のようになる。〔原典に見られないものはxで示す〕

Upaniṣad	Sirr-i-Akbar	Oupnek'hat	Hindustānī
kāṅsya	کھریال	k'herial	ghariyāl
mṛḡaṅga	پکھاوج	pak'haouadj	pakhāvaj
veṅu	بانس	bans	bāṅs
kiṅkiṅi	کھانت	k'henta	ghantā
bggala	دال	dal	dāl
x	ساون	savan	sāwan
x	بھادون	bhadwan	bhādon

ペルシャ語訳では、サンスクリット語原典の語が同義のヒンドゥスターニー語に置き換えられたり、あるいは説明的に補われている。ペルシャ語音写においてはkとḡは区別されないことが多いのであまり問題にならないが、母音の当て方にデュペロンが苦心していることがうかがえる。

次に、この作品のサンスクリット語起源の語の音写と同じ形をもつ語を、アブール・ファズルの『アクバル会典』からいくつか拾ってその発音表記に従った読みを示し、デュペロンのローマ字表記と比較対照してみると次のようになる。

### Ⅲ・2 アブール・ファズルの表記法

先に紹介したアブール・ファズルの『アクトバル会典』では、音写語に発音表記を示す解説が加えられているので、元のサンスクリット語などを復元することは容易である。彼は、音写法とその発音表記法について、ヒンドゥーの18種の学問の一つとして紹介する文法学 (vyākaraṇa) 〈彼の発音表記では biyākarna〉の項に詳説している。彼はサンスクリット語のアルファベットを52文字であるとして、それを3種に分けて解説する<sup>29)</sup>。

第一に14の母音 (svara) 〈彼の発音表記では sur〉は、a, ā, i, ī, u, ū, ṛ, ṝ, ḷ, ḹ, e, ai, o, au であると説明する。これらは、音写文字と発音表記を伴って示される。発音表記の後に表記に従って予想される発音を〈〉で示すと次のようになる。a = hamza' i maftūḥ 〈a〉, ā = hamza' i maftūḥ wa alif 〈a + a = ā〉, i = hamza' i maksūr 〈i〉, ī = hamza' i maksūr wa yā-yi taḥtānī-yi sākin 〈i + i = ī〉, u = hamza' i mazmūm 〈u〉, ū = hamza' i mazmūm wa wāw-i sākin 〈u + u = ū〉, ṛ = rā-yi maksūr 〈ri〉, ṝ = rā-yi maksūr wa yā-yi taḥtānī-yi sākin 〈ri + i = rī〉, ḷ = lām-i maksūr 〈li〉, ḹ = lām-i maksūr wa yā-yi taḥtānī-yi sākin 〈li + i = lī〉, e = hamza' ba kasra' i majhūl wa yā-yi taḥtānī-yi sākin 〈e +

i = ei〉, ai = hamza' i maftūḥ wa hamza' i dīghar-i maksūr wa yā-yi taḥtānī-yi sākin 〈a + i + i = ai〉, o = hamza' ba ḡamma' i majhūl wa wāw-i sākin 〈o + u = ou〉, au = hamza' i maftūḥ wa hamza' i mazmūm-i dīghar wa wāw-i sākin 〈a + u + u = aū〉。これらの母音は音量 (mātrā) 〈彼の発音表記によると mātar〉に関して、一音量のものは5種、a, i, u, ṛ 〈ri〉, ḷ 〈li〉, 二音量のものは11種、ā, ī, ū, ṝ 〈rī〉, ḹ 〈lī〉, e 〈ei〉, o 〈ou〉, ai 〈ai〉, au 〈au〉, am 〈am〉, aḥ 〈ah〉であると分類される。

第二に子音 (vyañjana) 〈彼の発音表記によると binjan〉は33あるとして、それぞれ schwa としての a をつけて解説する。ka = kāf-i maftūḥ 〈ka〉, kha = kāf-i maftūḥ wa hā-yi khafi 〈ka + h〉, ga = kāf-i fārsī-yi maftūḥ 〈ga〉, gha = kāf-i fārsī-yi maftūḥ wa hā-yi khafi 〈ga + h〉, ṇa = nūn-i nazdik wa az gulū wa bīnī pīdayish girad (n に近く喉と鼻から生ずる), ca = jīm-i fārsī-yi maftūḥ 〈cha〉, cha = jīm-i fārsī-yi maftūḥ wa hā-yi khafi 〈cha + h〉, ja = jīm-i maftūḥ 〈ja〉, jha = jīm-i maftūḥ wa hā-yi khafi 〈ja + h〉, ṇ = yā-yi taḥtānī-yi maftūḥ wa nūn-i khafi 〈ya + n〉, ṭa = tā-yi fauqānī-yi hindī-yi maftūḥ (インドの ta), ṭha = tā-yi fauqānī-yi hindī-yi

Sanskrit	Sirr-i-Akbar	Oupnek'hat	Ā'in-i-Akbarī
akṣara	اچهر	atscher	achchhra
ajñāna	اگیان	akan	aggyāna
agni	اگن	aguen	agni
amṛta	امرت	amrat	amrit
dharma	دهرم	dehram	dharma
prakṛti	پرکرت	prakrat	parkirti
bṛhaspati	برهسپت	brahspat	birhaspati
yoga	جوگ	djog	joug
jīvanmukti	جیون مکت	djiuous makt	jevvan mukat

ここでは、デュペロンが語末の子音に母音を当てていないことが注目される。

29) Abū'l Faḡl 1869. pp. 117-118.

maftūḥ wa hā-yi khafi (インドの ta + h),  
 ḍa = dāl-i hindi-yi maftūḥ (インドの da),  
 ḍha = dāl-i hindi-yi maftūḥ wa hā-yi khafi  
 (インドの da + h), ṇa = nūn-i ghaliz-i maf-  
 tūḥ (素朴な na), ta = tā-yi fauqānī-yi maf-  
 tūḥ <ta>, tha = tā-yi fauqānī-yi maftūḥ wa  
 hā-yi khafi <ta + h>, da = dāl-i maftūḥ <da>,  
 dha = dāl-i maftūḥ wa hā-yi khafi <da + h>,  
 na = nūn-i maftūḥ <na>, pa = bā-yi farsī-yi  
 maftūḥ <pa>, pha = bā-yi farsī-yi maftūḥ wa  
 hā-yi khafi <pa + h>, ba = bā-yi maftūḥ  
 <ba>, bha = bā-yi maftūḥ wa hā-yi khafi  
 <ba + h>, ma = mīm-i maftūḥ <ma>, ya =  
 yā-yi taḥtānī-yi maftūḥ <ya>, ra = rā-yi maf-  
 tūḥ <ra>, la = lām-i maftūḥ <la>, va = wāw-  
 i maftūḥ <wa>, ṣa = shīn-i manqūt-i maftūḥ  
 <sha>, ṣa = khā-yi maftūḥ <kha>, sa = sīn-i  
 maftūḥ <sa>, ha = hā-yi maftūḥ <ha>, 以上  
 が子音であると示される。

ここに示される発音表記 (i'rab) の方法は、  
 アブール・ファズルが初めて用いたものでは  
 なく、アラビア語文法学で用いられる伝統的  
 表記法を応用したものである。特に辞書や地  
 理書などにおいて、地名や人名などに付記さ  
 れ外来語の読み方を指示する役割を果たして  
 きた。アブール・ファズルはこの表記法を応  
 用して、さらにペルシャ・アラビア文字には  
 ないものとして二つの文字、すなわちヒンド  
 ウスターニー (ウルドゥー) 文字の ح と ج を  
 tā-yi fauqānī-yi hindi と dāl-i hindi と名づけ  
 て、すべてのデーヴァナーガリー文字を網羅  
 しようとしている。一方、鼻音の表記では、  
 すべての ن (nūn) で表してはいるものの、  
 発音表記においてかなり苦心の跡が見られる。

この表記法に従うと、文法学  
 (vyākaraṇa) は, kasra'i bā <bi> wa yā-yi  
 taḥtānī wa alif <yā> wa faṭḥa'i kāf <ka> wa  
 sukūn-i rā <r> wa faṭḥa'i nūn <na> という表  
 記から, biyākarna と読むことができる。さ

らに、音量については、一音量が hrasva  
 <rahswa>, 二音量が dirgha <dirgh>, それよ  
 りも長いものが pluta <pulta> と呼ばれるこ  
 とを紹介している。

### Ⅲ・3 ミールザー・ハーンの表記法

オーラングゼーブの時代に『インドの賜  
 物』を著したミールザー・ハーン (Mirzā  
 Khān) が示すデーヴァナーガリー文字をペ  
 ルシャ・アラビア文字で表す方法は、アブ  
 ル・ファズルのそれより体系的である。彼は、  
 結合子音も含めて35文字を子音として紹介す  
 る。まず、序文の第一章ではこれらが、イン  
 ドの人々の言語とアラビア語・ペルシャ語に  
 共通する発音をもつとされる18文字と、イン  
 ドの人々に特有の発音をもつとされる17文字  
 に分けられる。彼はアブール・ファズルと異  
 なり schwa を除いて表記しており、ペルシ  
 ャ・アラビア文字の排列に従ってそれらが列  
 挙されている<sup>30)</sup>。

始めの18文字は, a (i, u) = hamza',  
 b = bā-yi muwaḥḥada'i khafifa <b>, p =  
 bā-yi 'ajamī-yi khafifa <p>, t = tā-yi fau-  
 qānī-yi khafifa <t>, j = jīm-i tāzī-yi khafi-  
fa <j>, c = jīm-i 'ajamī-yi khafifa <ch>, d  
 = dāl-i khafifa <d>, r = rā <r>, s = sīn-i  
khafifa <s>, ṣ = shīn-i mu'jama <sh>, k =  
 kāf-i tāzī-yi khafifa <k>, g = kāf-i 'ajamī-yi  
khafifa <g>, l = lām <l>, m = mīm <m>,  
 n = nūn <n>, v = wāw <w>, h = hā <h>,  
 y = yā-yi taḥtānī <y> であるとされる。次に  
 インドの人々に特有の発音を持つとされる17  
 文字とは, kh = kāf-i tāzī-yi ṣaḥīla <硬い k>,  
 gh = kāf-i 'ajamī-yi ṣaḥīla <硬い g>, ṇ = kāf-i  
 'ajamī-yi maghnūna <鼻音化した g>, ch =  
 jīm-i 'ajamī-yi ṣaḥīla <硬い c>, jh = jīm-i  
 tāzī-yi ṣaḥīla <硬い j>, ṇ = yā-yi taḥtānī-yi  
 maghnūna <鼻音化した y>, th = tā-yi fau-  
 qānī-yi ṣaḥīla <硬い t>, dh = dāl-i ṣaḥīla <硬

30) Mirzā Khān No. 882 ff. 3-19.

い d), ṭ = tā-yi fauqānī-yi muṣqila <より硬い t>, ṭh = tā-yi fauqānī-yi aṣqal <最も硬い t>, ḍ = dāl-i muṣqila <より硬い d>, ḍh = dāl-i aṣqal <最も硬い d>, ṇ = nūn-i ṣaḡila <硬い n>, ph = bā-yi 'ajamī-yi ṣaḡila <硬い p>, bh = bā-yi muwaḥḥida'ī ṣaḡila <硬い b>, ṣ = kāf-i tāzī-yi aṣqal <最も硬い k>, kṣ = jīm-i 'ajamī-yi aṣqal <最も硬い ch>であるとされる。最後の kṣ だけが結合文字である。

第三章では、母音が発音表記を伴って示される<sup>31)</sup>。a = hamza'ī maftūḥa <a>, ā = hamza'ī mamdūda <長い a>, i = hamza'ī maksūra <i>, ī = hamza'ī maksūra wa yāyi ma'rūf <i+i=i>, u = hamza'ī mazmūma <u>, ū = hamza'ī mazmūma wa wāw-i ma'rūf <u+u=ū>, ṛ = rā-yi makusūra <ri>, ṝ = rā-yi maksūra wa yā-yi ma'rūf <ri+i=ri>, ḷ = lām wa rā-yi maksūratain <lri>, ḹ = lām wa rā-yi maksūratain wa yā-yi ma'rūf <lri+i=lri>, e = hamza'ī maksūra wa yā-yi majhūl <i+e=ie>, ai = hamza'ī maftūḥa wa sukūn-i yāyi taḥṭānī <a+i=ai>, o = hamza'ī mazmūma wa wāw-i majhūl <u+o=uo>, au = hamza'ī maftūḥa wa sukūn-i wāw <a+u=au>。さらにこれに, aṃ = hamza'ī maftūḥa wa sukūn-i nūn <aṃ> と aḥ = hamza'ī maftūḥa ba hā-yi sakīna <aḥ> を加えている。また、アブール・ファズルと同じように、音量についても、一音量を持つものとして a, i, u, ṛ <ri>, ḷ <lri>, 二音量を持つものとして ā, ī, ū, ṝ <ri>, ḹ <lri>, e <ie>, ai, o <uo>, au を挙げている。さらに母音にも含められた特別符号としての Visarga <bisarg>, Anunāsika <anunāsik> なども紹介している<sup>32)</sup>。ミールザー・ハーンの表記法では、語末の子音は長母音を伴う場合などを除いて表記されないことが多い。

先のアブール・ファズルの表記法と同じように彼の表記法に従って文法学 (vyākaraṇa) を見てみると, kasra'ī bā-yi muwaḥḥada'ī khafifa'ī mamdūda <bi> ba yā-yi mashmūla <yā> wa fathā'ī kāf-i tāzī-yi khafifa <ka> wa sukūn-i rā <r> すなわち bi + yā + ka + r + (n) = biyākarn となる。この作品でも、さまざまな特別符号の解説の後にアブール・ファズルと同様に、音量について触れられている。一音量は laghu <lagh>, 二音量は dirgha <dirag>, それ以上は pluta <pulit> と呼ばれると紹介している。さらに、巻末には辞書 (*Lughāt-i Tuḥfatu l-Hind*) が付け加えられていて、音写語の意味と共に発音表記が示されている<sup>33)</sup>。

#### Ⅲ・4 音写法と発音表記法

両者の示す音写法と発音表記法を〈付表 I〉に対照させてみた。〈 〉内は、ミールザー・ハーンの音写を示す。音写におけるペルシャ・アラビア文字のあて方については、両者の間にほとんど違いは見られない。ペルシャ・アラビア文字にはないヒンドゥスターニー (ウルドゥー) 文字の二つを用いていることも共通している。発音表記においては、ṣ を kh と読んでいることが等しい。鼻音については, ṇ, ṇ̄, ṇ̅ に同一の文字 nūn を当てながらも、それぞれの発音表記に違いがみられる。有気音についての表記も, ha を加えるだけのアブール・ファズルに対して、ミールザー・ハーンは「硬い (ṣaḡil)」という表現を用いて表している。また反舌音の発音表記においても、アブール・ファズルが「インドの (hindi)」と簡略に紹介しているのに対して、ミールザー・ハーンは有気音に用いた「硬い (ṣaḡil)」という表現の程度によって, tha, ṭa, ṭha や, dha, ḍa, ḍha を区別

31) *Mirzā Khān* No. 882 ff. 25-29.

32) *Mirzā Khān* No. 882 ff. 30-31.

33) この辞書は、*Ilm-i Lughātu l-Hind* と題され、4000余りの語が納められている。*Mirzā Khān* No. 883 ff. 75-300.

しようとしているところが特徴的である。ミールザー・ハーンが、発音上の違いにより文字を分類するところから始めていることは、先に紹介したアル・ビールニーの指摘に照らして注目される。

このような発音表記を伴うと、音写だけで示される場合と異なり、語中の子音の短母音の区別はもとより、文字の上では判別できない語頭の独立の短母音 a, i, u の区別、長音符号 (madda) のない独立の長母音 ā の区別, i, e, ai や ū, o, au の間の区別が可能になり、母音を伴わない子音を示す記号 (suqūn) や二重子音符号 (shadda) がなくてもそれとわかり、発音が明確になる。

発音表記は、先に述べたように伝統的方法であり、この時代にも生かされていた。シャー・ジャハーンの時代にアブドゥル・ラシード・アル・フサイニー ('Abdur-Rashīd al-Ḥusainī) の編纂によるペルシャ語辞書 *Farhang-i-Rashīdī* では、まず前書きで個々の文字が詳細に説明され<sup>34)</sup>、その後に必要なに応じて発音表記を伴った辞書が展開されている。さらに、アールズー (Ārzū) の名で知られるシラージュッディーン・アリー・ハーン (Sirāju-d-Dīn 'Alī Khān) のヒンドゥスターニー (ウルドゥー) 語の辞書にもこの方法は見られる。彼は、18世紀初めにその広範な知識をもとに、アブドゥル・ワーシ・ハーンサウィー ('Abdu l-Wāsi' Ḥānsawī) の著した『ことばの驚異 (*Gharā'ibu l-Lughāt*)』にもとづいて、ヒンドゥスターニー (ウルドゥー) 語の辞書『ことばの驚異 (*Nawādiru l-Ālfāz*)』をまとめた。この辞書では、ヒンドゥスターニー (ウルドゥー) 語がペルシャ語ばかりでなく、アラビア語やヒンディー語の同義語を交えて解説され、と

きにはアラビア語の読み方が発音表記を伴って示されている。<sup>35)</sup>

このように、アル・ビールニーの提起した問題を解決するのに、音写法の確定と発音表記の併用は有効な手段となった。そして、異なる言語を理解する上で重要な役割を果たし、その表記法をめぐって独自性も発揮されたのである。

#### IV 発音表記の示すもの

このように定められた規則に従って音写され、発音表記によって示されたそれぞれの語彙は、何を明らかにしてくれるのか。その一例をアブール・ファズルの『アクバル会典』に見てみたい。

『アクバル会典』の中で音写の形で示されるインド語起源の語彙は、第三部だけで1400語余りにのぼる。これらの語彙は、ほとんどの場合発音表記を伴っており、写本による異読や母音の表記のずれの数はそれほど多くない。そこに現れてくる特徴を見る前に、発音表記によってアラビア語化する i'rab の一般的特徴について触れておかなければならない。

一般に、アラビア語でもペルシャ語でも語頭の文字に関しては、母音を伴うことが原則である<sup>36)</sup>。従って子音連続で始まる外国語は、補助母音を用いたり子音間に母音を挿入することで同一音節内での子音連続を避けて発音される。すなわち、'Ismith < Smith や Baritāniya < Britain などという形になる。先にアル・ビールニーが繰り返し指摘したのもこのことである。この原則に従うことから、アブール・ファズルも Barhmā < Brahmā, barāhman < brāhmaṇa, duwija < dvija, sarāvāk < śrāvaka, sumrit < smṛti などという表記にしているのである。さら

34) 'Abdur Rashīd 1870. pp. 3-24.

35) Khān-i-Ārzū 1951.

36) ペルシャ語には **خواهد** のように、複合子音で始まる語もあるが、この wāw は「発音されない wāw (wāw-i ma'dūla)」と呼ばれ、「書かれているけれども発音されない (maktūb-i ghayr-i malfūz)」ので、問題にはならない。cf. Phillott 1919. p. 18.

に、この原則を語中の複合子音にも適用して、*ātamā* < *ātmā*, *ācārija* < *ācārya*, *addihyāya* < *adhyāya*, *sattuva* < *sattva*, *sūruja* < *sūrya*, *tanmātar* < *tanmātra*, *sansakāra* < *saṃskāra*, *biyāpti* < *vyāpti* などと補助母音を用いて表している。

発音表記によって、語中の短母音、アリフに伴われる独立の短母音、*i*, *e*, *ai*, *ū*, *o*, *au* の間の区別は明確になり、サンスクリット語語彙の発音をより忠実に表そうとしていることが読み取れる。しかしながら、最も注目したいのは半母音直前の子音の二重子音化である。

- (k) *bākkiya* < *vākya*, *sukkra* < *śukra*  
 (g) *sāmaggrī* < *sāmagrī*  
 (t) *āditta* < *āditya*, *citrā* < *citrā*, *sat-tiya* < *satya*  
 (d) *biddyā* < *vidyā*, *sūddra* < *śūdra*, *samuddra* < *samudra*  
 (dh) *addihyāya* < *adhyāya*  
 (s) *sahassra* < *sahasra*

これらは、文字表記の上では観察できなかったことである。ヒンディー語では、*tadbhava* 語にこの傾向がみられることはよく知られており、ここに挙げた例のほとんどがヒンディー語読みに近いことがわかる。しかしながら決定的に異なるのは、語末の母音をアブル・ファズルが残していることである。

先に、ベルシャ語訳ウパニシャッドに見られるヒンドゥスターニー語語彙として挙げたもののいくつかも含めて、*tatsama* 語もこの作品の中には紹介されているが、その数は少ない。しかし、その発音表記は *rāja* < *rāja* < *rājan*, *sarg* < *sarg* < *svarga* などのよう

にヒンディー語の読み方に従っている。

子音については、アルファベットの説明において *kh* < *ṣ* という読み方を示すことを既に指摘した。*b* < *v* や *k* < *g* や *s* < *ś* の例も数多くあることはいうまでもない<sup>37)</sup>。さらに、語頭、語中、語末で *j* < *y* という読み方も、*jajur* < *yajur*, *biparjay* < *viparyaya*, *birja* < *virya* などに見られる。また、複合子音についても述べておかなければならない。ミールザー・ハーンは *kṣ* を独立子音の中に含めた<sup>38)</sup>。しかしアブル・ファズルは含めていない。両者の複合子音の発音表記で注目されるのは、*chchh* < *kṣ*, *ggij* < *jñ* であり、ここでも先に見たように二重子音化が生じていることである。

- (kṣ) *lachchhn* < *lakṣaṇa*, *pachchh* < *pakṣa*, *achchhra* < *akṣara*  
 (jn) *aggiyāna* < *ajñāna*, *parggiyā* < *prajñā*

ここでもヒンディー語の影響が明らかであるが、語末の母音が極力残されていることに注目したい。

術語などに限られた例ではあるが、発音表記は文字音写だけでは観察されなかったヒンディー語の影響を色濃く表しているのである。加えて、サンスクリット語の発音を示そうという意図もはっきりとのぞかせていることがわかる。

## 結 び

単に「インドのことは」を意味する「ヒンダウイー」が、南インド・デカンの地でダキニー・ウルドゥー語として発展し、「シャー

37) *b* < *v* は発音上の理由からであり、語頭の *w*, *v* が *b* に変わるのはヒンディー語では一般的なものである。*k* < *g* と *s* < *ś* (*sh*) は表記上の理由からである。*k* と *g* すなわち *kāf-i tāzi* と *kāf-i fārsī* ('ajami), 及び *sh* すなわち *shin-i manqūta* あるいは *shin-i mu'jama* は *s* すなわち *sin-i muhmalā* とベルシャ語においてもしばしば混同される。特に *k* と *g* については、*k* だけで表す写本が多い。

38) サンスクリット語でデーヴァナーガリー文字のアルファベットにこの *kṣ* を含む場合は多い。先に紹介したハインリッヒ・ロートも文法書においてではないが、Kircher 1667. において、これと *jñ*, *ddh*, *ṣt* の四つの複合文字を独立の子音に含めて説明している。

ジャハナーバードの高貴な陣営のことば』と呼ばれるようになり、ヒンドゥスターニー語として本格的に文法・辞書を伴った言語として体系化されるのは18世紀になってからのことである。

ヒンドゥスターニー語研究の歴史は1698年にオランダ人 Joan Joshua Ketelaar によって文法書が著されたときに遡ることができる。続く世紀、1744年にドイツ人 Benjamin Schultz によって著された『ヒンドゥスターニー語文法 (Grammatica Hindostanica)』では、デーヴァナーガリー文字がペルシャ・アラビア文字を用いて表記され、1761年のイタリア人 Cassiano Beligatti の『バラモンのアルファベット (Alphabetum Bramhnicum)』では、逆にデーヴァナーガリー文字を中心として紹介された。そして、1796年のイギリス人 John Borthwick Gilchrist の文法書で、その体系化が徹底された。これら西欧の先駆者らによって示されたデーヴァナーガリー文字のローマ字表記からは、先に紹介したハインリッヒ・ロートの示す音写と対象させた <付表Ⅱ><sup>39)</sup>に見られるように、それぞれの関心の違いに影響を受けな

がらも当時の実際の発音を示そうとした苦心の跡が見てとれる。

このようなヒンドゥスターニー (ヒンディー・ウルドゥー) 語の確立など近代語成立の黎明期にあたる言語環境のもとで、インド・ムスリムは二つの側面でヒンドゥーとの言語の上の交流を深めたといえる。すなわち、術語の借用、文献の翻訳という形でサンスクリット語を通して伝統的な宗教・思想を学び、ヒンドゥスターニー語など土着語を通して文学の新しい展開を見せていったのである。サンスクリット語の音写とその発音表記に見られる音韻的特徴は、媒介言語としてのヒンドゥスターニー語の存在を示すものであり、その果たした役割の大きさを示すものである。さらに垣間見られるさまざまな土着語は、当時のムスリム社会におけるこれらの言語の広まりと成熟を示すものでもある。

今回は音写法と発音表記法を中心としてひとまずまとめてみたが、さらに個々の術語などに示されたムスリムの側の理解を検討していく作業を、語彙集の作成を含めて進めていくつもりである。

39) 表中のローマ字表記にあたっては、以下の資料に依った。基本となる Skt.-Roman は辻直四郎博士の表記法にもとづく。Roth: Camps and Muller 1988. Ms. Or. 171. fol. 3, Ketelaar: Vechoor 1976. p. 161, Schultz: Siddiqi 1977. pp. 9-11, Beligatti: Vechoor 1976. pp. 167-168, Gilchrist: Gilchrist 1825. p. i. Ketelaar 以下の文法書・辞書については Bhatia 1987. に詳説されている。

## &lt;付表 I&gt; &lt;アブール・ファズルとミールザー・ハーンの音写法と発音表記法&gt;

&lt;子音&gt;

Dava-nāgari	音写		Abū'l Faḥl の表記	Mirzā Khān の表記
	Roman	Persian		
क	ka	ک	ka	k
ख	kha	کھ	ka+h	硬い k
ग	ga	گ	ga	g
घ	gha	گھ	ga+h	硬い g
ङ	ṅa	ن	喉と鼻から生じる n	鼻音化した g
च	ca	چ	cha	ch
छ	cha	چھ	cha+h	硬い ch
ज	ja	ج	ja	j
झ	jha	جھ	ja+h	硬い j
ञ	ña	ن	yan	鼻音化した y
ट	ṭa	ٹ	インドの ta	より硬い t
ठ	ṭha	ٹھ	インドの ta+h	最も硬い t
ड	ḍa	ڈ	インドの da	より硬い d
ढ	ḍha	ڈھ	インドの da+h	最も硬い d
ण	ṇa	ن	素朴な na	硬い n
त	ta	ت	ta	t
थ	tha	تھ	ta+h	硬い t
द	da	د	da	d
ध	dha	دھ	da+h	硬い d
न	na	ن	na	n
प	pa	پ	pa	p
फ	pha	پھ	pa+h	硬い p
ब	ba	ب	ba	b
भ	bha	بھ	ba+h	硬い b
म	ma	م	ma	m
य	ya	ی	ya	y
र	ra	ر	ra	r
ल	la	ل	la	l
व	va	و	wa	w
श	śa	ش	sha	sh
ष	ṣa	شھ	kha	最も硬い k
स	sa	س	sa	s
ह	ha	ه	ha	h

<母音>

Dava-nāgari	音写		Abū'l Fazl の表記	Mirzā Khān の表記
	Roman	Persian		
अ	a	ا	a	a
आ	ā	ا	ā	ā
इ	i	ا	i	i
ई	ī	ای	ī	ī
उ	u	ا	u	u
ऊ	ū	او	ū	ū
ऋ	ṛ	ر	rī	rī
ॠ	ṝ	ری	rī	rī
ल	l̥	ل < لر >	li	lri
लृ	l̥̄	لی < لری >	lī	lrī
ए	e	ای	ei	ie
ऐ	ai	ای	aī	ai
ओ	o	او	ou	uo
औ	au	او	aū	au

<付表Ⅱ> 《西欧の文法家たちによるローマ字音写》

<母音>

Dava-nāgari	Skt.-Roman	Roth	Ketelaar	Schlutz	Beligatti	Gilchrist
अ	a	a	a	aw[o]	a	u
आ	ā	ā	ā	aa	à	a
इ	i	i	i	e	i	i
ई	ī	ī	ī	ee	i	ee
उ	u	u	u	u	u	ōō
ऊ	ū	ū	ū	oo	u	oo
ऋ	ṛ	re	ru	ree	rī	ṛī
ॠ	ṝ	rei	rū	luree	rī	ṛee
ल	l̥	lre	lu	luree	li	lī, lri
लृ	l̥̄	lrei	lū	lurree	lī	lee, lree
ए	e	e	ie	ay	e	e
ऐ	ai	ei	ei	ay	ei	ee
ओ	o	o	o	o	o	o
औ	au	au	au	ow	au	au

## &lt;子音&gt;

Dava-nāgarī	Skt.-Roman	Roth	Ketelaar	Schlutz	Beligatti	Gilchrist
क	ka	ga [ka]	ka	ka	ka	k
ख	kha	kha	ka	kha	kha	kh
ग	ga	ga	ga	ga	ga	g
घ	gha	gha	ga	gha	gha	gh
ङ	ṅa	nga	oua	gna	nga	ng, nk
च	ca	txa	ʃcha	cha	cia	ch
छ	cha	txha	ʃcha	cheha	ciha	chh
ज	ja	ja	dia	ja	gia	j
झ	jha	jha	dja	jeha	giha	jh
ञ	ṅa	nja	gna	nya	ngnion	ñ
ट	ta	tta	ta	ta	ta	ṭ
ठ	tha	ttha	ta	teha	tha	th
ड	ḍa	ḍḍa	tta	da	da	ḍ
ढ	ḍha	ḍḍha	tha	deha	dha	ḍh
ण	ṇa	ndḍa	na	ana	na	ñ
त	ta	ta	ta	ta	ta	t
थ	tha	tha	ta	teha	tha	th
द	da	da	da	da	da	d
ध	dha	dha	da	deha	dha	dh
न	na	na	na	na	na	n
प	pa	pa	pa	pa	pa	p
फ	pha	pha	pa	peha	pha	ph
ब	ba	ba	ba	ba	ba	b
भ	bha	bha	ba	beha	bha	bh
म	ma	ma	ma	ma	ma	m
य	ya	ia	ja	ja	gia	y
र	ra	ra	ra	ra	ra	r
ल	la	la	la	la	la	l
व	va	ua	wa	wa	va	w
श	śa	xa	scha	sa	scia	sh
ष	ṣa	ka [kha]	scha	kheha	kha	sḥ, kḥ
स	sa	sa	sa	saha	sa	s
ह	ha	ha	ha	ha	ha	h

## 参考文献

- 'Abdur Rashīd. 1870. *Farhang-i-Rashīdī*. ed. by Maulawī Zūlfaqār 'Alī. Bibliotheca Indica New Series No. 200. Calcutta.
- Abidi, S.A.H. 1975. "India's Rich and Valuable Contribution to Persian Literature in the Light of Some Recent Discoveries". *Khuda Bakhsh Annual Lectures Series* 5. Patna.
- Abū'l Fazl. 1868. *Ā' īn-i-Akbarī*. Vol. I. ed. by Blochmann, H. Calcutta.
- Abū'l Fazl. 1869. *Ā' īn-i-Akbarī*. Vol. II. ed. by Blochmann, H. Calcutta.
- Bhatia, Tej K. 1987. *A History of the Hindi Grammatical Tradition, Hindi-Hindustani Grammar, Grammars, History and Problems*. (Handbuch der Orientalistik. Zweite Abteilung, Indien, Ergänzungsband). Leiden.
- Al-Bīrūnī, Abū Rayhān Muḥammad b. Aḥmad. 1958. *Kitāb fī Tahqīqī Mā li'l-Hind*. Hyderabad.
- Camps, Arnulf and Muller, Jean-Claude. 1988. *The Sanskrit Grammar and Manuscripts of Father Heinrich Roth S.J. (1620-1668)*, Facsimile edition of Bibliotheca Nationale. Leiden.
- Elliot, H.M. and Dowson, John. 1964. *The History of India as Told by Its Own Historians*. Vol. III. Allahabad.
- E.I. 1987. *The Encyclopaedia of Islam*. New Ed., Vol. III. Leiden.
- Gilchrist, John Borthwick. 1825 (repr. of 1810). *Hindoostanee Philology: comprising a Dictionary, English and Hindoostanee; with a Grammatical Introduction*. London.
- Grierson, George A. 1968 (repr. of 1916). *Linguistic Survey of India*. Vol. IX. Indo-Aryan Family Central Group. Part I. Delhi.
- Hosten, H. 1916. "Jesuit Letters and Allied Papers on Mogor, Tibet, Bengal and Burma, Part II, Mīrzā Zū'l-Qarnain". *Memoirs of the Asiatic Society of Bengal* Vol. V. No. 4. Calcutta.
- Jāyāsī, Malik Muhammad. 1944. *Padmāvati*. tr. by Shirreff, A.G. Calcutta.
- Khān-i Ārzū, Sirājū-d-Dīn 'Alī. 1951. *Nawādiru l-Alfāz and Gharā'ibu l-Lughāt*. ed. by Sayyid Abdullāh. Karachi.
- Kircher, Athanasius. 1667. *China Monumentis*. Amstelodami.
- Mahābhārata*. 1979. ed. by Jalālī Nā'īnī. Tehran.
- Mīrzā Khān. *Tuhfatu l-Hind*. Khuda Bakhsh Library MS. No. 4622 (Hand List No. 882, 883).
- Mīśra Bandhu Vinod*. 1928. Lucknow.
- Mūbad Shāh. 1943. *Dabistān-i-Mazāhib*. ed. by Raḥīm Rizā Zāda'ī Malik. 2 Vols. Tehran.
- Mukālīma-i Dārā Shukoh wa Bābā La'ī (Les Entretiens de Lahore). 1926. ed. and tr. by Huart, Cl. and Massignon, L. *Journal Asiatique*. Tome CCIX. No. ii. Octobre-Décembre. Paris.
- Oupnek' hat* (Id est, Secretum Tegendum). 1801. ed. and tr. by Duperron, Anquetil. Tomus I. Paris.
- Platts, John Thompson. 1884. *A Dictionary of Urdu, Classical Hindi and English*. Oxford.
- Phillott, D.C. 1919. *Higher Persian Grammar*. Calcutta.
- Rizvi, Saiyid Athar Abbas. 1978. *A History of Sufism in India*. Vol. I. New Delhi.
- Rizvi, Saiyid Athar Abbas. 1983. *A History of Sufism in India*. Vol. II. New Delhi.
- Sachau, Edward C. 1983 (repr. of 1910). *Alberuni's India*. New Delhi.
- Siddiqī, A. 1937. "Indian Words in the Humāyūn Nāma". *Poona Oriental Series*. No. 39. *Jha Commemoration Volume*. Poona.
- Siddiqī, Abulais. 1977. *A Grammar of Hindoostani Language by Benjamin Schulzino (1741 A.D.)*. Lahore.
- Sirr-i-Akbar*. 1957. ed. by Tara Chand and Jalālī Nā'īnī. Tehran.
- 鈴木斌. 1957. 「ウルドゥー・ガザルの発展と傾向〔II〕」. 『東京外国語大学論集』25.
- Tuhfatu l-Hind*. 1975 (1354). ed. by Nūru l-Ḥasan Anṣārī. Tehran.
- Vechoor, Mathew. 1976. *Hindī ke Tīm Prārambhik Vyākaraṇa*. Allahabad.
- Ziauddin, M. 1935. *A Grammar of the Braj Bhakha by Mīrzā Khān (1676 A.D.)*. Vīśva Bharati Series No. 3. Calcutta.